小説「土」について

河合　透

私は過去二十年来長塚節の生まれた村（現在結城郡石下町）に住んでおります。前半の十年間は、節の小説「土」の舞台となった部落のすぐ近くにある村の中学校に出ていたこともございまして、早くから長塚節の文学に関心をもつようになったわけでございますが、だんだん節の文学に首を突っ込んでいってみますと、少年のころは、さほどにも思っていなかったこの明治時代の文人が、今日では、日本の近代文学史上でもまれな業績を残した人であることが分かってまいりまして、こういう立派な人が私たちの郷土茨城に存在していたのだということについては、茨城県人はもとより、日本中の人たちがもっと深い関心を持ってくれてもいいではないかと思うようになりまして、だんだんそういう方面での仕事のお手伝いをさせていただいているわけでございます。そういう意味で、このたび茨大の学園祭でこういう催しを企画されたことは大変意義深いことでありますし、ありがたいことだと思います。今日は、私の後に控えておられます平輪光三先生の前座ということで、長塚節の文学を主として散文、それも「土」を中心として紹介しながら、私が日ごろ考えていることをお話ししてみたいと思います。

長塚節が三十六歳で、九州博多の大学病院で亡くなりましたのは、大正四年二月八日でございますから、今から約六十年ほど前のことになります。歌人としての方面はともかくとして、散文作家としての節は、生前「ホトトギス」などにときどき写生文やあまりぱっとしない短編小説を書いたり、長編といえば朝日新聞に「土」を連載したりしておりましたが、これも必ずしも評判にならず、それどころか「あんなくだらぬ小説をいつまでだらだら載せているのか」という批難があったといわれるほどの、そんなふうにしかみられていなかった青年田舎文士の節が、死後六十年の間に、全集もすでに二度ほど出版され、今度三度目の全集が企画されているのでございます。それから「土」という作品は、何度も劇化されたり、映画化されたりしてますし、短歌の方でも、写生文の方でも、今やあらゆる方面から研究の対象とされて、ますますその名声が高められつつあることは、まことに

よろこばしい限りでございますが、同時にそのことは、節の文学が現代に生きる私たちを何か魅了する特質を備えているからではないかと私は思います。その特質とは何か。一言にしていうならば、それは、節の文学の持つローカル性、あるいは郷土色、あるいはまた農村的体質とでもいいましょうか、とにかく節の文学は徹頭徹尾田舎者の文学であった。明治四十年十一月に節が、友人でアララギ派の歌人であった岡麓あての手紙の中で「田舎者はとうてい田舎のことを書くよりほかはこれなく候」という言葉を書いておりますけれど、そういう田舎者としての文学に、今日多くの人が心をひかれていく要素を持っているのではなかろうかと私は思っているのであります。

私が言うまでもないことですけれども、日本の近代百年の文化の歴史というものは、大ざっぱにいいますと、中央志向型とでもいいますか、とにかく都会を中心にして発達してまいりました。そうして、都会の機械文明の持つエネルギーが一方では私たちの生活に驚嘆すべき便利さをもたらしてくれたと同時に、一方ではまたそれによって生じてきた人間疎外の現象が、現在では農村地域にまでも非情な圧力をもってのしかかってきて、私たちからしだいに人間性の尊厳を剥奪しつつあります。最近脱都会ということがしきりにいわれておりますけれども、その意味を、人々が失われつつある人間性の回復をかつての日本の農村の自然、あるいは農村に生きた人々の姿に求めようとしている現れだとみるならば、近代日本文学において長塚節ほど日本の農村を美しく正直にとらえて描いた作家はいないであろうと私は思いますし、それから長塚節の文学ほど脱都会といわれるような現代の精神の空白に応えてくれる要素を持っている文学もそんなにないんではないかとさえ思っているわけです。そういう観点から節の文学を眺めた場合、私はこれまでいろいろな角度から分析され、研究されてきた節の文学ではありますが、特にその風土との関係、すなわち節が生まれ育ったあの常総地帯という郷土の風土と彼の文学とのかかわり合いをもっともっと掘り下げてみる必要があるのではないかと思っているわけでございます。

長塚節が明治四十三年「ホトトギス」に発表した短編小説に「隣室の客」というのがあります。この小説は、節の小説の中でも唯一の自伝的要素を持った作品といわれているのでありますが、その冒頭で節は自分の生まれ育った村、そのころは岡田郡国生村といわれました。そこを紹介しております。

私は山に遠い平野の一部で、利根川の北に僻在して居

る小さな村に成長した。村は静かな空気の底に沈んで楪林に包まれて居る。私の村は瘠地であったので自然楪林が造られたのである。丈夫な楪の木は伐っても伐っても古い株から幹が立って忽ちに林相を形って行く、百姓は皆ひどい貧乏である。

とこういうふうに書いております。この国生という所は、昔は一世の風雲児といわれた平将門の史跡としてゆかりの深い村で、国生という名も将門時代の国庁のあった所、その国庁が訛ったものだといわれている所なのであります。地図でみますと、ここは東京から直線にしてわずか六十粁に足らないわけであります。東京からそれほど近い所にありながら、節の作品に描かれているこの地域は、およそ当時の文明社会とは縁遠いほどの未開の農村社会として写し出されているわけです。

例えば、「土」が明治四十五年に単行本として出されたときに、夏目漱石が有名な序文を寄せておりますが、その中にこういう部分があります。

「土」の中に出て来る人物は、最も貧しい百姓である。教育もなければ品格もなければ、ただ土の上に生み付けられて、土とともに成長した蛆同様に憐れな百姓の生活である。先祖以来茨城の結城郡に居を移した地方の豪族として、多数の小作人を使用する長塚君は、彼らの獣類に近き、恐るべく困憊をきわめた生活状態を、一から十まで誠実にこの「土」の中に収め尽くしたのである。彼らの下卑で、浅薄で、迷信が強くて、無邪気で、狡猾で、無欲で、強欲で、ほとんど余ら（今の文壇の作家ことごとく含む）の想像にさえ上りがたいところを、ありありと眼に映るように描写したのが「土」である。

漱石がここで「土」に出てくる農民を「蛆同様に憐れ」だとか「獣類に近い生活状態」だとかいう読み方をしていることについては、かつて臼井吉見氏が厳しい批判を述べてますし、私も全く賛成できないのでありますが、その点については後でもう少し詳しく触れることにしまして、とにかく「土」の舞台となった節の村というのは、当時電燈や交通機関もなく、農耕生活はほとんど人力に頼るといったもので、村人はまだ、前近代的な因習の中に潜みうごめいているといった状態であったわけです。

「土」の冒頭をちょっと読んでみます。

烈しい西風が目に見えぬ大きな塊をごうっと打ちつけては又ごうっと打ちつけて皆痩こけた落葉木の林を一日苛め通した。木の枝は時々ひうひうと悲痛の響きを立てゝ泣いた。短い冬の日はもう落ちかけて黄色な光を放射しつゝ目叩いた。さうして西風はどうかする

とぱったり止んで終ったかと思ふ程静かになった。泥を拗切って投げたやうな雲が不規則に林の上に凝然とひつゝいて居て空はまだ騒がしいことを示して居る。それで時々は思ひ出したやうに木の枝がざわざわと鳴る。世間が俄に心ぼそくなった。

これは非常に有名な書き出しでありますが、ここに描かれたこの地方の冬至に近い日の夕方の寒々とした状景、またこの一種独特の擬人法を混えた文体は、節の村に生きる人たちの貧しくあわれな姿をいわば象徴的に写し出しているといってもよいと思います。「土」は、ご承知と思いますけれども、貧農の小作人である勘次の妻お品が、勘次が利根川下流の土方工事に出稼ぎに行っている留守中に破傷風で倒れてしまう、知らせを受けて帰ってきた勘次が十六になる娘のおつぎと二人で必死の看病をするのですが、そのかいもなくお品は苦痛にのたうちながら息を引きとっていく、そこからはじまるのであります。お品は、三人目に生まれてこようとするお腹の子どもが、自分たちの生活を極度にひっ迫させることを恐れて、ほおずきの根で自ら堕胎を決行し、そのときほおずきの根についていた病毒が、お品の命を奪ったのでありました。大事な働き手を失った勘次の一家は、その日以後それこそ文字どおり土をはうような惨憺たる生活を続けていくことになるのであります。

この「土」という小説は、節の村にあった事実をほとんどそのまま描いたものだといわれています。島木赤彦あてに書いた節の手紙に「『土』の人物は皆現存せり」とあります。登場人物にはすべてモデルがあり、皆実名は違いますが、おつぎさんという人は今なお健在ですし、卯平は昭和七年（九十四歳）、勘次は昭和十一年（七十一歳）まで生存しておりました。

勘次の家はなぜこのように貧乏だったのかということなんでありますが、そのことについては、当時の農村社会における階級構造の在り方が問題にされなければなりません。節の非常に鋭い客観写生の眼は、たとえ意図的なものではなかったにせよ、当時の農村社会の貧乏の根源に存在する階級関係の矛盾の実情を見抜いていたわけでございます。「土」の第七章に次のような文章があります。

勘次の田畑は晩秋の収穫がみじめなものであった。それは気候が悪いのでもなく、又土地が悪いのでもない。耕耘の時機を逸して居るのと、肥料の缺乏とで幾ら焦慮っても到底満足な結果が得られないのである。貧乏な百姓はいつでも土にくつゝいて食料を獲ることにばかり腐心して居るに拘はらず、其の作物が俵にな

れば既に大部分は彼等の所有ではない。其の所有であり得るのは作物が根を以て田や畑の土に立って居る間のみである。小作料を払って畢へば既に手をつけられた短い冬季を凌ぐ丈けのことがともすれば漸くのことである。彼等は自分で田畑が忙しい時にも其の日に追れる食料を求める為に比較的収入のいい日庸に行く。

ところが、そうして日やといに行くものですから、作物の生育に三日を争うようなときでも畑へ出て行くわけにいかない。また、天然の肥料に必要な落葉を掻くことや青草を刈ることも皆金銭に余裕のあるものがやってしまったあとからやるよりほかないので、十分に求められない。そこへもってきて近年では化学肥料がどんどん入ってくる。そのほうが格段に収穫がよいわけでありますが、その化学肥料を買う余裕もむろんない。つまり畑を耕す時期が遅れる。それに肥料が手に入らない。そういうことから、貧乏な百姓の田畑は、ますます収穫がみじめなものになっていくよりほかない、というような意味のことを節は書いているのであります。この第七章について、井上清という歴史学者は「ここにはほとんど現在の社会科学的な正確さをもって寄生地主制が小作人の貧乏の根本的原因であることが示されている」と述べております。そういう観点で「土」を読んでいきますと、例えば初めのほうに出てくる卵買いの商人が、「このごろは上海卵が入って来て卵が安くなってしょうがない」とこぼしていく場面がありますが、これも当時日清・日露戦争を経て急激に膨張してきた日本の資本主義経済機構が農村の零細商人にまでその影響を及ぼしてきつゝある様子を日常的な場面として描いたものととらえられますし、また、勘次が盗みを働いたときに東隣の地主のおかみさん――これは節のお母さんをモデルにしている――が、勘次が警察に引っ張られるようになっては、残った子どもたちがかわいそうだと、いろいろ暖かい心づかいをするそのため旦那さん――これは節のお父さんに当たるわけで、実際には当時県会議員、また、議長にもなった人ですが、隠然たる勢力を持っていた人ですね、それに働きかける。そうすると、駐在所の巡査が「もう絶対に勘弁できない」とまで言っていた勘次の犯罪が、旦那の口きき一つでもって、無事に解決されてしまう場面などもあります。「土」という小説のリアリズムが今日非常に高く評価されておりますのは、「土」の描写が、このように当時の農村社会の現実的矛盾のありようを鋭く剔抉し得た作品であるとみなされているところに一面の根拠があろうと思われるわけでありますが、そのような農村社会の階級構造というものは、当時は全国の農村に

至極ありふれたこととしてみられた現実でありまして、「土」はそういう現実をただ忠実に写実した小説であり、階級性そのものを問題として取り上げた作品でないことはいうまでもありません。否、むしろ農村の貧の問題を階級制の問題として直接の主題としなかったればこそ、「土」はそのすぐれたリアリズムを発揮し得たのではないかと私は思うのであります。

それでは、「土」はどうして書かれたのでしょうか。この問題について究明するためには、「土」の舞台となった土地柄についてもっと究めてみる必要があります。「土」の舞台は、当時戸数わずかに五十戸余りという鬼怒川べりの農村にほとんど限られておりました。一口に鬼怒川べりの農村と言いましたが、鬼怒川というのは、ご承知のように栃木県の鬼怒沼付近に発し、茨城県の西域をずっと南流しております。その沿岸、西部と東部には、広大な農村地帯、今日茨城の穀倉地帯といわれている、それがくり広がっている。その中を帯のようにうねうねと流れているわけでございます。現在のように、あそこに石下橋とか豊水橋とかいう東西両域のかけ橋は当時はありませんでした。したがって、鬼怒川の西側と東側は、要所要所の渡し舟を通じてわずかに交流し合うといった程度でありましたから、お互いに隔絶されていたといえばそうもいえるわけでございます。しかし、この渡し舟のみによる交流が、「土」の村を全く孤絶させていたかといえば、必ずしもそのようには考えられません。現に、鬼怒川の西、東には昔から親類同士の家が相当数あります。節も上京するたびに、鬼怒川の渡し舟で東側へ出て来るわけですし、「土」の原稿もしょっちゅう東側にある郵便局へ来て投函したといわれています。「土」の中でも勘次はしばしば渡し舟で東側へ出かけて行きます。また、卯平は「土」の村から更にずっと西南の利根川を越えた野田の町に行っています。しかし、「土」の描写したところは、ほとんど鬼怒川の西岸地域に限られているといってもよろしい、つまり節の郷土の村に限られているのであります。勘次も、東側の医者や鍛治屋へ出かけて行きますが、そこで用を足すと直ぐ自分の村へ帰って来るんですね。節は、自分の村の、そういう戸数五十戸余りという狭い地域の恐ろしく未開で貧困な有様を、それこそ漱石が指摘しているように、一から十まで徹底的に克明に描き尽くしたのであります。私はちょっと首をかしげざるを得ません。節はどうしてことさら自分の村のことだけを取り上げたのだろうかと。自分の村のいわば恥さらしのような未開で野蛮な状態を一から十まで写したがために、むろんそればかりではないと思い

ますが、そういったことも原因になって、長塚節さんという人は、国生部落の人たちにはあまり好感を持たれなかったような面もあるようです。例えば、昭和十八年に平輪光三先生などが中心になって、国生部落に節の歌碑を建てようとしたときに、部落の人がおれたちの部落には建てないでくれといってもめたこともあるそうです。それで節の歌碑は国生部落の隣り部落に建てられました。

話がわき道にそれましたが、節はどうして自分の村のことばかり書いたのでしょうか。それは、あんまり舞台を広げてしまうことによって全体が締まらなくなってしまうことを節が素樸な小説作法上からも得策としなかったからなのか、あるいは、節が根岸派できたえた客観写生の手法は、どこまでも自分の熟知しきった事柄だけに限るという幅の狭いものだったからなのか、もちろんそれもあろうかと思います。しかし、私は「土」を書いたときの節の非常な意気込みを思ったときに、そのような小説作法や写生主義の理念とかいったもの以上のものが、何か長塚節の内面を激しく突き上げていたのではなかろうかと思われてならないんです。例えば「土」執筆中の節の態度について、親友の橋詰孝一郎という、この人は下妻中学（現下妻一高）の国語の先生をしていた人ですが、その人が「思い出のかずかず」という中で、こんなことを書いています。

私のような無学の者は、ただまじめに骨を折るよりほかはないとは長塚君が口ぐせのように言われたことである。「土」の一篇は全くこの努力の結晶でなければならぬ。あれを書く間君はどのくらい苦労したかしれぬ。早苗振のある家へ招いてもらってその夜実際をみる。博労に頼んで謡をうたわせる。芸女に銭をくれて無智の青年に伍してそのうたをきく。巫女を頼んで口よせをする。爺婆の群に酒を与えて念仏仲間の行事をみせてもらう。真夜中に十丁の畔道を鬼怒川の堤まで辿っておつぎがモロコシをすてるという記事の正確を期した。いい加減にしておくことは、長塚君の最もきらいな事の一つであった。

そのあと略しますけれども、節が「土」を書くために村の小学校の図書室で毎日長時間腰かけていたために痔疾を患って大変難儀をしたことなどが紹介されております。また、私はこのごろ「土」が連載された朝日新聞の切抜を調べておりますが、研究者の石川義雄さんの報告によりますと、「土」は明治四十三年六月十三日から十一月十七日まで百五十一回にわたって連載されたわけですが、この間休載になったのはわずかに七日間で、しかもその理由というのは、新聞社の都合

であるとか、八月の末に起こった洪水による鉄道の不通のためとかいうことで、節目身の都合で、いわばサボタージュして「土」が休載になったことは、一日もなかったということです。これは驚くべき熱心さだと思いますね。このことについては、さらに、最近「日暦」という雑誌の中で、若杉慧さんが節の岡麓あての次のような手紙を取り上げて論じております。

病気も中途に打棄て「土」の脱稿迄は骨折り可申候。成るべく早く結末をつけよとのことに有之候へ共、百冊回位にわたらねば済み申すまじく、段々危介物にされ申候。社の営業部に於ては、殊に渋面致し居る由申候。女学生に喜ばれぬが一つの原因と申候。小生も不評判は覚悟の前故、驚き不申候へ共、回数の短縮は堪へ不申候に付、手加減をせぬため社の不利益になるならば、社のためにはじめたること故、只今にても中止すべき旨申遣し候。それもこれも身体の工合悪く後から追はれ候ことのみ苦痛に候云々。

非常に健康を害して苦痛なんです。自分が書いている小説が女学生にも喜ばれない、評判が悪い、新聞社の方からは何とか早く終わるようにしないかといってきた。だから新聞社にとって不利益になるならば、まあやめても仕方がない、といっております。しかし、ここで若杉さんが注意されているのは、節は「おれはこの小説の筆を折る」とは言っていないということです。「新聞社にとって不利益ならば、連載を中止するのはやむをえない。が、しかし、この小説を無理に短縮することはとうていしのびない。まして、途中でやめてしまうわけにはいかない」という節の「土」に対する執念のようなものが、この手紙の文面からはうかがえると言っているのであります。「土」のリアリズムの持つ迫力が節のこのような激しい内部エネルギーから生まれてきたものであろうことは、以上のことからも推断されるわけであります。

さて、本論を更につきつめていきましょう。先程紹介しました「隣室の客」の冒頭部分をまたちょっと引用してみます。

……百姓は皆ひどい貧乏である。だが楪がずんずんと瘠地に繁茂して行くやうに村には丈夫な子供が殖えて行く。或時は其聚って騒ぐ声が夕焼の冴えた空に響いて遠く聞えることがある。私は自分の村を好んで居る。さうして楪林を懐しいものに思って居る。

このやせた鬼怒川の西岸地域というのは、関東ローム層という火山灰質の土地柄であり岡田村（陸田）という名前のとおり、水田は少ないわけです。畑作の収穫もみじめなものでありまして――現在はそんなことはありま

せんが――したがってそのころは鬼怒川沿岸ことごとく櫟林が作られていたのであります。それに対して鬼怒川の東岸地域というのは、「アクト（沃土？圷？）」といわれる沖積土で水田に恵まれた平坦な土地柄であります。常磐線の取手駅で下館駅のガソリンカーに乗り換えて北上してきますと、水海道を過ぎるころから鬼怒川の土手が左手間近に迫ってきますが、右手一帯には広い水田地帯が見えてくるでしょう。この水田地帯は下妻あたりまで広がっております。ここは遠い万葉時代に北の方に鳥羽淡海という歌枕にもなった大きな湖水があり、また、南方にはヤワラ（野原）などといわれている　今でも谷和原村という村がありますが、一面に葦の生い茂った湿原地帯があったんですね。そういうことで、そこは土地も非常に肥えているわけです。そこでアクト地帯に住んでいる人々は、鬼怒川西岸地域のやせた土地を「ノガダ（野方）」と言い、そこに住んでいる人々を近年までノガダッポなどと言って揶揄してきた風があります。ノガダがアクトに比して経済的にも文化的にも低い水準にあることを半ば蔑視していたからなのでしょうか。初めに申し上げましたが、私が国生部落に近い村の中学校へ赴任したのは昭和三十年でございましたが、そのころアクト地方の子どもたちは、ほとんど洋服を着ておりましたのに、その村ではまだ木綿の筒袖を着ている子どもたちがたくさんいたように記憶しております。現在では、そのようなことは全く見られなくなりましたが、鬼怒川をはさむ東西両域の格差は、いろいろな意味で長い間両者の風俗、文化、因習等に隔たりを作ってきたようであります。

私はこの「土」の舞台が鬼怒川の西岸地域に限られていたということの意味をもっと深く考えてみる必要があるのではないかと思います。

明治三十五年八月、正岡子規がその死去する一か月ほど前に節にあてて有名な手紙を出しています。

只今、君にもろた大和芋（一般につぐ芋と云ふ、つぐ芋山水などといふ事を君は知らぬか）を食ひながらつくづく考へた。此芋が君の村で今初めて植ゑたといふ程なら、君の村は実に開けて居らぬ野蛮村に違ひない。恐らくは小学校もないであらふ。若し尋常校があるなら高等校などないであらう。兎に角子供は学校にも行かないで鼻垂れて居るのが多いであらう。思ふに君の村では君の家一けんだけ比較的ひらけてゐて他は尽く野蛮なのに違ひない。そこでぼくの考へるには、君には大責任がある。それは君は目ら率先して君の村を開かねばならぬ。学校も立てるが善い。村民の子弟

の少し俊秀ともいふべき者ならば、君は学資を出して（若くは村費を出して）東京へでも水戸へでも出し、簡易農学校位を修業させてやるが善い。其外農談会とか幻燈会とかを開いて村民に知識を与へねばならぬ。委細は面談の節話すべし。一家の私事だけでも忙しいといふやうな能なしでは役に立たぬ。其傍で一村の経営位には任じなくては行かぬ。

あと略しますけれど、こういうことを書いているのであります。

年譜の上でみていきますと、明治三十年代の末期から四十年代にかけて、節は文学修業の傍ら自分の家の農事経営に懸命に取り組んでいきます。それは明治二十年に県会議員にうって出た節のお父さんの源次郎という人が当時のいわゆる井戸塀政治家の類にもれず、家の財産を政治につぎ込んでしまう。そのため借財がかさんできて、節にしてみれば、何とか家運を挽回しなければならない、というような覚悟もあったんでしょうし、縁談を控えて、嫁さんを迎えるための財産を準備しておかねばならぬという意図もあったのかも知れません。しかし、また一方、村の開明地主として、この遅れた村の開発に尽くさなければならないという正岡子規からの示唆が大きく働いていたであろうことは十分に考えられることであります。

節は、村の櫟林を伐って、それを炭に焼いて木炭を作ります。木炭と同時に醋酸を取ることを計画して、自分の庭に炭焼窯を作り、非常に計画的に炭焼の方法を研究します。そのために千葉県の方まで出向いて行って、炭焼方法を泊り込みで習ってきたりするのです。写生文の中に「炭焼の娘」というのがありますが、あれはその時の体験をもとにして書かれたものです。

そのころは、村の青年会長としても率先して農事改良事業に努めて、当時の結城郡長から模範青年会長として表彰されてもいます。

それからまた、櫟林の根を掘り起こして、そのあとに蚕豆を作り、更に、蚕豆を地中深く埋めて基肥に備え、そこに岐阜県あたりから仕入れてきた竹林を作るわけですね。このために岐阜県からそのころ竹作りの名人といわれた坪井伊助という人を招いてきて、本格的に竹林経営に取り組んだりします。その竹を売って化学肥料を買う、あるいは竹を蛇籠という細長い籠に編んで、そこに割栗を入れて鬼怒川の護岸工事に備える、ということも考えていたようです。そういうことから、「節さんという人は、からださえ丈夫であったなら、あるいは文学者などにならずに、二宮尊徳のように殖産興業の面で村に尽くしてくれるような人になったのではないでしょう

か」と、私に語ってくれた村の古老もおりました。

長塚節のそういう農民的意識、自ら額に汗して働く農民的姿勢ができていなかったなら私は「土」のあの強烈なリアリズムは完成されなかったのではないか、まして写生主義の手法だけでは、「土」はあれほどまでに迫力のある作品になり得なかったのではないかと、こう思うのであります。

この点については、作品に触れながらもう少し突っ込んでいってみましょう。

勘次が対岸の村にある鍛冶屋さんへ行くところがあります。その帰りがけに鬼怒川の渡しを越えて自分の村へ帰ってくるのですが、そのとき東岸の河原で万能をふるっている婆さんたちと会うわけです。その婆さんたちは、砂の中から木片を堀り起こして背負った籠の中に入れているんですね。

「どうするんだね」勘次は一人の側へ立って聞いた。

ひよっと首をもたげたのは婆さんであった。婆さんは腰をのして強い西風によろける足を踏しめて、

「これ干して置いて燃すのさ」ときたない白髪と手拭とを吹かれながら目をしかめていった。

「どうしてもこうなっちゃぺろぺろ燃えてあっけなかんべえね」勘次は聞いた。

「赤え灰になってな、火も弱えのさ、そんでも麁朶買あよりゃえゝかんな。松麁朶だちったってこっちの方へ来ちゃ生で卅五把だの何だのって、ちっちえくせにな、俺らような婆でも十把位は背負へんだもの、近頃じゃ燃すものがいちばん不自由でしょうねえのさな」婆さんはいった。

「松麁朶で　五把ぢゃ相場はさうでもねえが、商人がまるき直すんだから小さくもなるはずだな」勘次は首を傾けていった。「さうだごっさらよなあ、そりゃさうとおめえさんどこだね」万能を杖にして婆さんはいった。

「俺等川向こうさ」

「そんじゃ燃す木は有っとこだね」婆さんはさらに勘次の唐鍬を見て

「たいした唐鍬だがよっぽどすんだっぺな」

〈以下少しとばします〉

僅に鬼怒川の水を隔てゝ西は林が連なって居る。村落も田も畑もその林に包まれて居る。東は只低い水田と畑とで村落が其の間に点在して居る。其処に家を囲んで僅かな木立が有るばかりである。したがって薪の欠乏から豆がらや藁のやうなものも皆燃料として保存されて居ることは勘次も能く知って居た。しかし其の

薪の欠乏から自然にかういふ砂の中に洪水がもたらした木片の埋まって居るのを知って之を求めて居るのだといふことは彼は始めて見て始めて知った。彼は滅多に川を越えて出ることはなかったのである。

ここから読み取れることは、勘次の村は貧乏ではあるけれども、少なくとも東岸の人たちのようにその日その日の燃料に事欠いて、河原の砂の中から木片を求めるようなことまではしなくて済む、ということであります。ノガダの土地は、やせてはいるけれども、いや、やせていればこそ、多くの楢林が作られているからです。楢というのは皆さんご存知のことと思いますが、非常に丈夫で、荒々しい木肌を持つ、そして燃料とするとき火力も強い、そのような楢の木が持つイメージは、いかにもノガダの土地柄にふさわしく、またそこに住んでいる人々の質朴な人情さえも思わせます。かつて、橋田東声という人が、「土の人　長塚節」という本の中で、長塚節の文学を「楢林の文学」と評したことがありましたけれども、節は少年のころから鬼怒川沿岸のこの楢林にずいぶん親しんで育ったのでした。節の文学に楢林の趣が象徴されると見なされるのも、この風土から受けた自然の影響だったのかも知れません。節の村は、未開で、貧しい村ではありましたけれど、それだけに自然とともに起き伏しする人間のあるがままの質朴な人情がそこに描き出されたのではないでしょうか。

「土」は窒息的な小説だとも評されています。漱石も、序文の中で「土」の悲劇は涙さえ出ない苦しさだ、雨が降りっこないかわりに、生涯照りっこないお天気のような苦痛である、などといっておるようですが、私は、「土」をけっしてそのようには思いません。

お品が倒れたときに、勘次が出稼ぎ先から帰って来て、おつぎといっしょに介抱する場面、お品の亡くなったあと、おつぎ勘次と弟の与吉を助けながら、しかも野田から帰って来た卯平と勘次との間に立って、いろいろ気を使いながら、けなげに働いていく場面、勘次が、そのあまりにひどい貧乏のために村人から何かにつけて馬鹿にされ、つまはじきされながら、しかし、彼が一たび唐鍬を握って大地に立ったときには、実にたくましく健康な農民として描かれている場面、そういう場面がたくさんあります。勘次親子ばかりではありません。部落の人たちの年中行事の中にも、あるいは早苗振という田植仕事のあとの賑やかな宴席が描かれ、あるいは老人たちの念仏講や、村のお祭りの催し等が健康な笑いを含んで描かれているわけです。

そこには「土」の村の自然や人々の生活にほんとうにとけ込んでいたものでなければ描けない真実の剔抉、貧

しい人々に寄せる暖かい愛情があります。「土」は明治三十年代から四十年代にかけての日本の農村のいわば密画であるといわれた作品であり、その現実には、不安定で厳しい風土的条件と貧しく苛酷な労働を強いる社会的条件があったわけでございますが、しかし、私たちが今日「土」を読むとき、そこに描かれた農村の自然や年中行事等に何かしら限りない郷愁を覚えるわけでございます。と、同時に、勘次やおつぎたちの貧窮を極めた生活の中に、何かまた涙を誘われるような人間としての共感的感動を呼び起こされるのであります。私は、そこに、「土」のリアリズムが持つ大きな特質と価値を認めないわけにはいきません。

思うに、長塚節をしてそのような作品の制作に生命を燃焼させたものは、彼の生い育ったあの常総地方、鬼怒川西岸の風土に培われたものではなかったのでしょうか。長い歴史の間、ノガダッポなどと嘲笑され、楪林と陸稲のほかには目ぼしい産物もなかった自分の郷土の土地柄が貧しければ貧しいほど、そこに限りない愛情を寄せると同時に、その貧しさからの反逆として節は自己の文学的衝動を「土」に叩きつけずにはいられなかったのではないか。節がもし、ノガダよりも肥沃なアクト地方に生まれ育っていたならば、「土」のような文学はどうてい形象されなかったであろうと私は思います。

そういうわけで、節の文学をより深く解明していくためには、どうしても私たちの郷土常総の歴史や風土についてもっともっと理解を深めなければならないと考えます。皆さんも、お暇の折にはぜひ一度石下町にお出かけくださって、鬼怒川べりの文学散歩をじっくりと楽しんでいただきたいと思います。いろいろほかにも触れたいことございましたが、すでに時間となりました。

長時間の御静聴を深く感謝いたします。

（茨城県教育庁指導課勤務）